

継承者その2

2021. 8. 4

私は、勤めていた学校で、製本した「学級通信『薫風』」を先生方全員にプレゼントしていたわけではない。製作部数からして限りがある。中には学級通信に興味がない方もいるだろう。私がお世話になった方、これからが楽しみな若い先生方などを中心に、感謝の気持ちを込めて渡していた。

その結果、今では、私の書斎には、多くの先生方が精魂込めて作製した様々なタイトルの学級通信が並んでいる。学級通信ライブラリーである。そうか。このライブラリーをSS先生に見せるのもわるくはない。これから会えるかもしれない若い先生方にも見せればいいのである。

しかし、あの頃は、さすがに、自分が校長になり、SS先生のような方と出会うことまでは、考えが至らなかった。その分の在庫は取っていなかった。

あの頃の私が、2か月間という短い時間をともにした方に、『薫風』を渡していたということは、その方に私が何かを感じていたはずである。限られた時間の中での毎時間の英語の授業である。さぞやご苦勞をなされたことだろう。必死だったにちがいない。そんな仕事ぶりやお人柄、などなどから私は『薫風』を差し上げる判断をしたのだと思う。

そうでなければ、渡してはいないだろう。出会いは、期間の長さではない。その中身である。密度の問題である。このことが証明されたわけである。『薫風』を渡した、あの頃の私の判断は間違いではなかった。

以前、「学校支援地域本部事業」のことで「生涯学習指導員」の方が、学校に来てくださったことがある。いろいろなお話をしていただき、有意義な時間となった。その中で、その方が、毎日この「校長室だより」を読んでくださっていることがわかった。それも、書いている私よりも、その内容を覚えていてくださっている。だいぶ前に出した号のことまで簡単に出てくる。

その方が「いつも隣の〇〇と一緒に読んでいるんです」とおっしゃっていた。そのときは、〇〇さんのことがわからず、どなただろうと思っていた。ところが、今回のことで、〇〇さんこそが、『薫風』をSS先生にとおっしゃってくださった方であったことが判明した。すべてがつながった。これを縁といわずして何と言おうか。

〇〇さんには「SS先生は大丈夫ですから、この『薫風』は、ずっとこれからも持っていてください」とお願いした。大丈夫であろう。自分の学級通信のタイトルを、『薫風』にしようとしているSS先生である。〇〇さんには、SS先生の『薫風』もぜひ読んでいただきたい。〇〇さんに読んでいただくことが、継承者としてのSS先生の使命である。